

膿瘍形成性虫垂炎に対する Interval Appendectomy について

— 腹腔鏡下虫垂切除を中心に —

わか つき とし ろう まきの や まさ ひろ ふく もと よう じ
若 月 俊 郎 牧野谷 真 弘 福 本 陽 二
ひさ みつ かず のり かじ たに しん じ こう の きく ひろ
久 光 和 則 梶 谷 真 司 河 野 菊 弘

キーワード：膿瘍形成性虫垂炎，Interval appendectomy，腹腔鏡下手術

要 旨

2011年より膿瘍形成性虫垂炎に対して interval appendectomy (IA) を導入してきた。2019年12月までに17例を経験し、そのうち13例を腹腔鏡下手術で施行した。平均年齢46.4歳，男女比9：4であり，平均抗菌薬投与は10.6日で平均入院期間は16.8日であった。膿瘍の平均最大径は49.1 mmであり，経皮的膿瘍ドレナージは7例に施行された。細菌培養では，嫌気性菌が一番多く認められ，虫垂炎再発は2例に認められた。CT上膿瘍消失が平均79.6日で認められ，平均112.8日後に虫垂切除を施行した。腹腔鏡下手術の平均手術時間は93.6分，平均出血量は3.8 ml，術後平均入院日数は5.4日であった。術中，術後合併症を1例ずつ認め，術後病理で low grade mucinous neoplasm を1例認めた。膿瘍形成性虫垂炎に対する IA は安全に施行され有用であった。IA に対する腹腔鏡下手術も安全に行われ，IA の第1選択は腹腔鏡下手術で良いと考える。ただし，回盲部が必要となる症例もありある程度の技量が必要と考える。

はじめに

膿瘍形成性虫垂炎は，緊急手術が基本であった。しかし，術後合併症が14.3～57.7%と高いこと^{1,4)}，回盲部切除など拡大手術となることが多い^{5,6)}ことから，interval appendectomy (以下 IA) の有用性が報告されてきている^{7,8)}。当院では，2011年

より腹部 CT 画像にて膿瘍形成性虫垂炎を考える症例に対し IA を導入してきた。今回，当院の IA の現状について検討を行った。

当院の治療方針

腹部 CT 画像にて膿瘍形成性虫垂炎を考える症例に対し IA を施行している。ただし，汎発性腹膜炎，ショック状態の患者は適応外としている。絶食とし，抗菌薬投与を開始し，膿瘍ドレナージは CT ガイド下に可能な症例に行っている。保存

Toshiro WAKATSUKI et al.

松江市立病院消化器外科

連絡先：〒690-8509 島根県松江市乃白町32-1

松江市立病院消化器外科